エッセー

外から見、内で教えた全学共通カリキュラム英語

異文化コミュニケーション学部教授　佐竹 晶子

小学生の頃、何かの雑誌に、生まれ変わるとしたらどの動物になりたいかという心理テストのようなコラムが、ライオン、鳥、犬などのイラストとともに載っていた。その時、すぐさま、これと「さかな」を選んだ。自分でも不思議に思うほど、一瞬の躊躇いもなかった。実際は魚にもくねる、飛び上がる、噛みつくいろいろあるだろうが、ともかく自分のイメージはその絵に描かれていたように、流れに身を任せ、真っ直ぐ前に進んでいけばよいというもので、それが非常に心地よい生き方に思えたのだ。1991 年に非常に幸運なことに立教に職を得、以来、主任等の重大な役につくでもなし、全学的な企画を発案することもなく、その時々の制度の中で、只管、目の前の授業で何をどう教えるか考え、準備することに専念してきた。ただ、思ったことはそのまま口に出してしまう方なので、幾度か物議を醸したことはある。

全カリ起ち上げの頃、私は準備委員会の一員に抜擢されたが、要するに当たり障りのない名前を加えるのが目的であったのか、中核のメンバーで全てが決められ、最終的な報告の会議に出席しさえすればよかったことに後で気づいた。ある日、そうした会議の場で、英米文学科のみ少人数の communicative なクラスが全員に割り当てられるという表を初めて見て反対したら、それが問題となり、準備委員長が激怒しているというので辞任した。当時、全カリ推進者が表明していたことは、「英語の立教」の名を復活させる、そのためには、全ての学生をというのは無理なので、出来る学生を伸ばす、少人数精鋭でいくというものであった。とことん平等主義の私はこうした考えについていきかねた。

立教に入って少し経った頃、長老格の先生から立教の良いところは万機公論であることと教えてもらったが、そのせいで何も変わらない。そうした風潮に業を煮やした少数の先生たちによって、全カリの言語改革はぐんぐんと推し進められた。長い机を二つ対面式に並べて、反対する教員に対しての説明会のようなものもあったが、その中で仏語の先生が、恐らく学生運動の時のようなというニュアンスで、実行部隊という言葉を使って批判していたのを覚えている。ともかくいろいろ揉めたが、準備に携わった先生たちの回想録を読むと毎晩夜遅くまで会議を繰り返し、よくやったと今は感服の至りだ。実松先生が「ハレ」の日々と書いていたが、我々は「ケ」の境界にいたのかもしれない。やり方は強引であったかもしれないが、全カリの改革によって、教授法というそれまで顧みられなかったことに対する意識が一挙に高まり、授業の質が確実に改善した。

私はカリキュラム等を決める立場にはなかったが、実際に新しいクラスを教える方は全面的に託されてきた。略して IWE という communicative クラスのパイロットは、

池袋で実松先生、Shaules 先生の率いるチーム、新座で Allum 先生と native speaker の非常勤の先生と私とが担当し、3 分ごとに次々と入室する学生に対して総計何時間もかけて interview 方式の期末試験を行うなどかなり徒労も伴う試行錯誤をした。Discussion クラスのパイロットでは、各学部の先生が自由に視察に来て、評価されるという憂き目にあった。因みに、この Discussion Center 設置の際は、全カリ創設の時とは反対に、私は少数の推進派の立場にあった。必修コマ数が減っても少人数のクラスがよいということに絶対の確信を持っていたからである。12 号館 2 階の巨大な楕円形テーブルを囲んだ各学部代表者の攻撃（少人数の閉鎖的空間では精神的に参る学生が出る、これでは語学学校だ等々）の一巡するのに耐えるのは苦痛の限りであったので、いたたまれずこちらも発言したら、後から谷野言語部会長に呼び出され、専門委員は意見を述べてはいけないと叱られた。

という訳で全学的に私が果たしたことは取るに足らぬことばかりだが、英語の授業には熟練したと思う。20 代後半の頃に教えた学生には大変悪いことをしたと今は思うのであるが、一体どうやって教えていたのか思い出すことすらできない。当時の英語の先生は英文学か英語学出身者で、大抵自分の好きな作品に日本語の注解が添えられた B5 判の教科書を学生に読ませているだけであった。その後、海外の教科書には自由に考えさせ課題をこなす過程で英語を学んでいける類のものが多様にあることを知り、その教授用手引きを読んだり、British Council の教授法 workshop に参加して勉強したりした。初回の FD で reading の部の担当を命じられた時には、主にそうした海外版教科書の内容を紹介するに過ぎなかったが、寺崎先生に労いの言葉を頂いた程、多くの日本人英語教員の間では知られていない教材であった。同じ FD で私が触発されたのは speaking を担当された実松先生による information gap という考え方であったと思う。それ以来、学生に英語で話させるには、情報を伝えるのが必要な状況を設定しなければならないと肝に銘じ、この考えは非常勤を勤めていた駒場の理学部の学生に対しても、科学記事を使って最新の実験報告の内容を互いに説明させるという形で応用した。学生に高度な要求をする場合は、まず信頼を勝ち取る必要がある。こちらも必死で準備するが、そうした努力に応え、それまで英語は読む一方であった学生が話すことを楽しめるまでの力をつけていくのを見るのはとても嬉しかった。

反対に最下位にレベル分けされたクラスを教えるのも好きである。規律を保つためにはそれなりに厳しく構え、課題が明快である必要がある。自信のない学生に英語で話させるため明るい雰囲気を作る。私は常々、教室に入るのは役者が舞台に立つのと似ており、performance であると考えてきた。別に仮面を被るのではなく、自然体の自分で、ただちょっと張り詰めて。更に後年思ったのは、私にとって授業は手細工の工芸品。よくコピー用紙に写真などを切り貼りしたり、カードにして配ったりするからかもしれないが、例えば、最初の 10 分くらいで眠気を覚まさせるために、まずはこれ、次にこれと、機械的な作業から、より自主性や思考を要する課題へ移行する戦略を練る。でも、その日その日の調子に従って柔軟に変えていく。まさに手作りなのだ。

　これくらいが私の経験から学んだ知恵で、これから教え始めるという先生に参考になれば幸いである。明日、或いは、数日後の授業という、自分の手の届くごく狭い範囲で精一杯働いてきたのが、立教在職中の私の人生であった。

さたけ　あきこ